

『ゴルフとは、自らを自らで励ますこと。』



バリューゴルフ
VALUE GOLF
www.valuegolf.co.jp

キャディ、ブルース・エドワーズの話(1)

50年近くゴルフの仕事をしてきて、さまざまな人に出会ってきた。歴史に残る名プレーヤーはもちろんのこと、彼らの右腕となって勝利に導いたキャディ、トーナメントを展開するゴルフコースのデザイナー、芝生やバンカーを管理する知恵のあるスタッフ。名刺箱を整理すると、何万人もの仲間たちが思い浮かぶ。

さて、今回はその中でも、ゴルフ界では伝説化しているトム・ワトソンのキャディの話である。トム・ワトソンはPGAツアー39勝、メジャー大会通算8勝、5度の賞金王に輝くレジェンド。温厚な人柄で、まさにゴルフ界最高の紳士といえる。そんなレジェンドにはプレーのパートナーであり、親友でもあるブルース・エドワーズというキャディが存在する。1973年、当時プロ2年目のワトソンは23歳。まだまだ駆け出しで、賞金ランク78位。そんなワトソンに練習場で一人の青年が声をかけた。そこからこの物語は始まる。

「僕をあなたのキャディにしてくれませんか」
ブルース・エドワーズである。

プロのキャディを目指す若き青年は、そのすさまじい熱意でワトソンの専属キャディになった。

「ここで守ってどうするの、攻めなきゃだめだ」
「ティーグラウンドは追い風だが、グリーン上はアゲインストだ。フックラインに見えるが、実は小さくフックする」

メモ帳に書かれたコースに関する彼の分析は、彼がキャディを務めたすぐの大会で6位という結果を残した。当時のキャディの仕事は、ただ荷物を持つだけだったが、エドワーズはキャディの地位を大きく向上させた。ゴルフというスポーツは、試合中、何度も選手の心を迷わせ、時に浮足立させる。そんな時に、キャディのアドバイスや言葉の数々が勝負に大きく影響した例は今や枚挙にいとまがない。

1977年から1980年の4年間、トム・ワトソンは連続賞金王に輝き、黄金時代を迎えた。やがてイップス病というスランプにかかったワトソンは、試合の出場を見送ることも多くなり、収入も激減。このコンビは輝かしい記憶とともに解散した。

エドワーズは2年後、グレッグ・ノーマンと共に世界中のトーナメントを総なめにし、キャディとしての最高のキャリアを積み上げた。

そのころ、不調にあえぐワトソンに一本の電話が入る。ワトソンの誕生日にエドワーズはこう言った。「僕はノーマンのキャディをやめるよ。再びフェアウェイを歩こうよ」



戸張 捷 Sho Tobaru

1945年、東京生まれ。高校からゴルフを始め、3年で全日本ジュニア3位、大学4年で日本アマ9位。住友ゴム工業(現SRIスポーツ)に入社後、株式会社ダンロップスポーツエンタープライズへ出向。トーナメントディレクター、プロデューサーとして日本ゴルフ界に貢献した。現在は、ゴルフキャスターとして活躍するほか、ゴルフトーナメントやイベントのプロデューサー、コンサルティングなども手掛けている。